

他にも、明治末期に建てられたとされている京町家で、四代にわたり清水焼製造・販売を営んできた陶点晴かわさきでは、日用品などの親しみやすいやきものが店内に所狭しと並べられているなど、それぞれの販売店が個性を持ちながら、一体となって町並みを形成している。

毎年8月7日～10日に開催される陶器まつりは、大正初期に精霊迎えに訪れる参詣客を対象に夜店を出したのに始まるとされ、五条通沿いには数百の出店が並び、所狭しと色鮮やかな器が並べられる。登り窯からやきものを焼く煙が漂うような光景は見るのがなくなったが、登り窯が存在したことを偲ばせる坂道において、店の主人が、やきもの店に並んだ器を手取る清水寺の参詣客と会話を交わす姿がそここにあり、今なおやきものまちは健在であり、活気にあふれている。

これらの日常の営みや、陶器まつりの際の営みが、往時を思わせる登り窯などの歴史遺産や五条坂の歴史的な町並みと一体となって、活気ある伝統産業の技術の香りを感じさせている。

(イ) 西陣・織物のまち

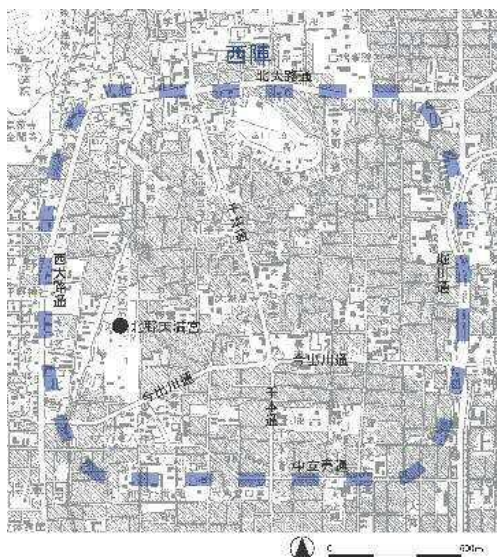


図2-37 西陣

西陣織は、京都を代表する伝統産業である。その生産は多くの工程に分業され、それぞれに高度な専門技能が必要とされる。西陣では、なおこれらの職人が伝統を守りながら、織物の生産を行っている。

西陣とは正式な地名ではなく、西陣織の関係

者が集中する地域の総称といってよい。おおむね、東を堀川通、北を北大路通、西を西大路通、南を中立売通に囲まれた範囲を呼ぶのが通例である。

西陣の地における機業の歴史は、その名の起こりよりはるかに古く、平安時代に律令制の官司のひとつであった織部司の職工たちが機業に従事するためにこの地に住んだことに始まる。平安時代の後期に律令制の諸官庁の崩壊以後も職工たちはそれまでの官機に代わって私機の生産を続け、機業地を形成していった。

室町時代、応仁の乱によってこの地も荒廃した。戦火がおさまると地方に離散していた職工が再び戻り、西軍・山名宗全の陣が置かれた堀川の西あたりを中心に集住した。西陣の名の由来はこれによっている。

江戸時代後期になると、西陣は享保15年



写真2-65 西陣の町並み

(1730)の「西陣焼け」や、天明8年(1788)の「天明の大火」、加えて、桐生、丹後などのいわゆる「田舎絹」の台頭や質素倭約令によって沈滞し、明治を迎えた。

こうした沈滞を打開したのが明治6年(1873)にフランスから輸入されたジャカード機(力織機)による技術革新であった。ジャカード機は明治中頃から普及するマニユファクチュアによって広がり、徐々に中小の織元や自営業者にも広がっていった。現在、最初期のジャカード機は、京都市指定・登録有形文化財として財団法人西陣織物館などに所蔵されている。

西陣地区の町割の特徴としては、通りと通りの間を辻子と呼ばれる路地がつなぐ形態がみられる。平安京の条坊制に由来する京都洛中の